

# 店舗用エクステリア用品のデザイン

水野潤<sup>\*1</sup> 今西千恵子<sup>\*1</sup>

## Design of Signboards for Shops

Jun MIZUNO and Chieko IMANISHI

Tokoname Ceramic Research Center, AITEC<sup>\*1</sup>

既存の陶磁器製品市場はモノの充足感の高まりや消費者ニーズの多様化、海外製品の流入など非常に厳しい状況にある。そのため、新規性のある商品による新たな市場創出が求められている。本研究は今まであまり取り組みがされていない店舗用エクステリア用品の商品開発を目指した。店舗用陶磁器製品はインテリア装飾品を中心に看板やプラークなどのサイン、駐車場やアプローチの景観演出部材等が考えられるが、本研究では新規性と目につき易さを考慮して看板に的を絞ったデザイン開発を進めた。

## 1. はじめに

常滑市は六古窯の一つに数えられ、「伝統ある陶業の町」として有名である。現在でも製造業の多くを焼き物関連企業が占めている。町の中、至る所で焼酎瓶、陶管、園芸用品、建築部材などの焼き物が積まれた風景があり、時代を感じさせる造りの工場や古い煙突などが残っている散歩道は散策する観光客の人気を集めている。また、常滑市沖では中部国際空港の建設工事が進められており、開港後はさらに多くの人々がこの地域を訪れることになる。当然、臨空都市として各種サービス施設が必要になり、飲食店や物販店など多くの店舗が整備される。こうした店舗にもこの地域が培ってきた焼き物の文化や歴史を感じさせる情緒や雰囲気を加えることが重要である。焼き物による店舗周りの演出は町の景観を向上させるだけではなく、常滑焼への理解とイメージの向上に繋がり、焼き物産業の発展に良い影響が期待できる。また、近年輸入が増加している安価な海外製品に対する対策上、競争力のある商品開発が必要であり、新規技術の向上や伝統技術の見直しなどが求められている。このような背景に加え、手作りの人間的な暖かさのある商品に嗜好が推移していること、さらに常滑ではかつてテラコッタという大型特注建築部材が作られ、多くのビル装飾につかわれた歴史があること、看板はまさに店の顔であり、よく目立ち、町の景観への影響が大きいことなどから対象アイテムを看板に絞り込みデザイン開発を行った。

## 2. 資料収集とデザイン

### 2.1 各地の看板

世界各国の看板や日本の看板の資料収集を主に書籍から行った。曲線と金色を多用した優雅なドイツの看板、黒い鉄製で重厚な感じのポーランド、物語を絵看板にしたイギリスのパブ看板などそれぞれのお国柄があり興味深い。我が国では北海道・ニセコ町と富山県・井波町の例を挙げる。ニセコ町の十数店舗では、その店の商品をモチーフに金属製の看板が掲げられ、見て楽しく町の景観作りに一役買っている。看板は一人の板金作家の手になるもので技法やサイズなど統一感が感じられる。一方、富山県・井波町は木彫の町と知られ、通りには木製工芸品を販売する店が並んでいる。ここでは多くの店舗に木製看板が掲げられ、木製品の町を実感できる。計画的に看板が設置された訳ではないが、町全体に木という一つの素材の統一感があり、好印象を与えている。

### 2.2 看板の形態分類

収集した看板情報を基に、焼き物で作ることを考慮しながら看板の形態を3つのタイプに分類し、それぞれのタイプ毎に特性を抽出した。その結果踏まえ、花屋やベーカリーなど数種類の店舗を想定して、アイデアの展開を行い、図1に示すようなデザインスケッチを作成した。なるべく常滑らしさを感じられるよう工夫をするとともに、こうした看板が町中に普及し、愛着を持って呼ばれるように「土(ど)かんぱん」と名付けた。図2はそのロゴタイプである。

\*1 常滑窯業技術センター応用技術室



図1 各種店舗を想定した看板



図2 土かんぱんのロゴタイプ



写真1 青果店「嘉平」



写真3 魚料理の店「常滑庵」



写真2 「山茶花の」やど



写真4 蟹料理と酒の店「蟹亭」

### 2.2.1 平行壁付けタイプ

表札の様に板状で、施工も壁に直接貼り付ける一番簡単なタイプ。陶磁器製サインでは最も基本的で問題も少ない。大型の物は制作しにくい、タイルの様にいくつかのユニットに分割する方法もある。この方法では規則正しく陶板が並び変化に乏しくなりやすい。四角いユニットではなく文字や柄などをうまく分割し、大きなサインを構成させればスケール感、変化も表現できる良い方法である。また、陶磁器製のサインとして立体製品を壁に取り付ける方法もインパクトが強くなり、効果的と思われる。

### 2.2.2 直角タイプ

この方法は壁に貼り付けるのではなく、壁から直角につきだした腕木に陶板を取り付けるタイプである。江戸時代にも多く見られる形式で、建物に直角に取り付けられるので通りを往来する人々からの視認性は良好である。陶磁器という素材の場合では、表裏2面が見えることになるので、2枚張り合わせるなど工夫が必要になる。これが立体物であればこうした問題はなく、印象に残りやすいサインとなる。

### 2.2.3 独立タイプ

建物とは独立して設置されるタイプ。大型が要求されるが、台座やベース板などに他素材を用いると良い。平板では案内板に、立体物ではモニュメントとなり、公共性の高い場所にも適している。

## 2.3 成形方法

看板の制作方法であるが、その性格上、店名やシンボルマークなどその店固有の部分が必要である。そのため、一品生産のフルオーダー形式での制作となる。こうした制作方法に産地企業が、十分対応できる体制ではないが、業種ごとに既成部品化できる部分もある。

## 3 . 試 作

### 3.1 使用素地

焼き物は耐候性が高く、看板として適した特性を持つ反面、重量が増加し、取り付け方法に問題が出る場合も考えられる。本研究では取り付け金具や建物躯体への負担を軽くするため、新とこなめ焼食器素地<sup>1)</sup>(以下新とこ土)に活性炭を加えて焼成した軽量素地<sup>2)</sup>を用いた。

### 3.2 試作品

#### 3.2.1 青果店「嘉平」

モチーフに常滑らしさを表現した看板である。常滑市樽水に昔から伝わる「嘉兵衛鎌」という話がある。話は鎌を忘れて芋掘りに向かったお百姓の嘉平(嘉兵衛)にカラスが「カヘー」と叫んで知らせたという。写真1はこの話をヒントにデザインした看板である。カラスと鎌に加え、嘉平の文字にはサツマ

イモをアレンジした。話を知らない店の商品と看板のモチーフが結びつかないが、説明を聞けば地域に対する興味や店への愛着が増し、記憶に残りやすい。カラス・鎌の刃は軽量土に化粧土やグレーの釉薬を用い、文字は新とこ土に青系の釉薬を掛け、ともに還元焼成をした。文字を貼り付けたベース板には木材を用いた。

#### 3.2.2 「山茶花(サザンカ)」のやど

写真2の看板は特に店舗の種類を想定してデザインしたのではなく、汎用性のある形状とした。常滑市の花「サザンカ」の文字と花をモチーフに切り抜きをした陶板をアケビの蔓でつないでボックス形とした。このボックスを壁面に固定したL字型金具に被せネジで固定した。ボックスはナチュラルなテイストを狙ってアケビの蔓で組み立て、内部には照明をいれ、夜間の視認性と演出効果を高めている。すべて軽量土を使用し、化粧土を掛け酸化焼成を行った。

#### 3.2.3 魚料理の店「常滑庵」

写真3は魚料理店の他、民宿や釣具店向けにデザインした看板である。取り付け金具を釣り竿に見立て、魚(カサゴ)を釣っている場面を表現した。取り付け金具の腕木には2寸径の陶管を取り付け常滑らしさを演出した。カサゴは軽量土でビスク、文字は新とこ土を用い、タタラから切り抜き一部に白系の釉薬をかけて還元焼成した。文字を木製のベース板に貼り付け、腕木から吊り下げた。

#### 3.2.4 蟹料理と酒の店「蟹亭」

お酒も楽しめる料理店を想定した。大きめの陶板に蟹をかたどったレリーフと切り抜き文字の店名を貼り付けた。主営業時間が夜間であることを考慮し、写真4に示すように蟹の甲羅内部に電球を配置し、蟹が光の中に浮かびあがる構造である。ベース板、蟹は軽量土に化粧土を掛け酸化焼成、文字は新とこ土を用い、還元焼成した。

## 4 . 結 び

- (1) 常滑焼による店舗用新製品の開発を目指した。
- (2) 焼き物の看板に的を絞り込み、アイデアの展開を行い、その中から4点を試作した。
- (3) 試作品は軽量素地を用いて金具や躯体の負担を軽減した。

## 文 献

- 1) 松下福三, 福原 徹, 生浦京子, 田中正洋, 愛知県常滑窯業技術センター報告, 27, 1~5 (2000).
- 2) 松下福三, 今西千恵子, 愛知県産業技術研究所研究報告, 1, 64~69 (2002).